

分けと診療システムを構築いたしました。近畿大学は、平常時の再診のみで1日平均約2,300名の外来受診があったため、『発熱者の診療場所』と『一般外来』との距離を確保し、一人の内科医が47日に1回、4時間ずつ診療を担当する輪番制としました。この体制で三次教育医療機関ながら、平時病院機能への影響を最小化して、担当職員からは一人の発症者も出さずに9ヶ月で約3,000人の発熱者を診療することができました。

現在は、院内だけでなく病院間の感染対策協体制として、南大阪で6年間継続している14の中核病院が参加する抗菌薬感受性サーベイランスネットワークを構築し、北大阪地区においても大阪医科大学と協力して8病院参加の同様のネット

ワークを構築しています。また、感染対策地域連携拠算という項目が本年度より新設されたところ、17の小規模病院（全国でも異例に多い数です）が当関西医科大学感染制御部の支援を希望して連携することになっております。

「感染症学」という学問に私自身もずっと助けて貰ってきたと感じておりましたが、地域の連携病院の橋渡しにも「感染制御部」が必要とされる時代となりました。この領域の今後の展開に私もとても期待しております。

若い先生方！ この専門領域に参加いただけたら、面白く充実した仕事の機会が得られること請け合いです。お待ちしております。

琉球大学医学部医学教育企画室准教授に就任して

琉球大学医学部医学教育企画室准教授 屋良 さとみ（5期生）



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様には、ご健勝にて日々ご活躍のこととお慶び申し上げます。このたび平成24年2月1日付けにて琉球大学医学部医学教育企画室准教授を拝命致しました5期生の屋良さとみと申します。この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

医学科同窓会には、二代目の会計として、またそれ以前ほぼ創立当時より携わっており、皆様にも時々この紙面上でご連絡させて頂いていたので、今回この場でこのような形でご挨拶させて頂くことになったことに、私自身が少々不思議な違和感と照れくささを感じております。

私は5期生として母校琉大医学科を卒業後、第一内科に入局し呼吸器を選択、その後自然な流れ（担当患者さんや大学院等）で“びまん性肺疾患（間質性肺炎）”を専門とするところとなりました。“びまん性肺疾患”は割と稀な疾患で、他院より大学病院にご紹介頂く割合も多く、大学にて有意義な遣り甲斐を感じながら、診療を現在も続けさせて頂いております。

医学・医療臨床の日々を過ごしていると気づき

にくい点なのですが、“医学教育”の重要性は世界的にも以前より認知され始め、日本でも昭和44（1969）年には既に「日本医学教育学会」が創立され、現在に至るまで活発な活動を中心となってされておられます。琉球大学医学部でも平成17年より医学教育企画室は設置されましたが、皆様“兼任”の立場で活動されておられました。社会と医学・医療の変化は激しく・速く、社会の医療界に望むニーズも高まり、かつ外国との関わりも急速に高まっており、それらの変化にいかに対応するかは国としても医学・医療の大きく重要な課題となってきております。そしてこの全国的・世界的な“医学教育”の重要性の高まりのもと、琉球大学医学部でも“医学教育”を推進するための医学教育企画室に専任教員を置く必要性が生じたことで今回就任した次第です。

良き医師などの医療人を養成するためには、医学教育・医療の現場が直面している課題について、卒前・卒後の医学教育の担当者が連携して取り組む必要があります。また離島を多く抱えた本県では、地域医療・離島医療にも広い視野で目を向ける必要性が高いと思われます。

多くの方々（学生、研修医、指導医、コメディ